

## 2 環境思想としての農本主義——橋孝三郎を中心に——

松戸 修一

エントロピーの処理機構を欠く工業に対し、そもそも農業はエントロピーの処理機構を含み持った人間の営みであった。ところが、近代農業が高度経済成長期を起点とする日本社会の工業化（産業化）と分かち難く結び付いた結果、現在、農薬や化学肥料などによる人体被害や環境汚染、砂漠化や土壤流出の進行、農山村の過疎化など、農業・農村をめぐる様々な問題が生じている。今後、ますます農業問題の座標軸は「農業＝環境問題」へとシフトさせる必要性に迫られてくるに違いない。

このような状況の中で、現在、農業を環境問題と捉える取り組みとしてまず思いつくのは「有機農業」であろう。有機農業は、「物質・生命循環の原理に立脚した農業」と言われ、いわばそれは、市場経済原理が支配的になるにつれ排除されてきた、エントロピーの処理機構を内包する人間の営みとしての農業に転換する試みである。まさに、有機農業は市場経済原理に基づく農業のあり方を批判または反省し、それが有する非市場経済的価値を見直していこうとする運動なのである。

ところで、農業の非市場経済的価値を探求する思想や運動が、戦前期、とりわけ1910～20年代においてもうすでに形成されていたことは留意すべきことである。その思想とは「農本主義（農本思想）」である。そもそも、この時期の代表的な農本主義は、都市から農村に移住し、そこで農業労働に従事する「帰農」した人間によって展開されていた。彼らが輩出された時代背景には、急速に進展する資本主義化——工業化（産業化）や都市化——があり、専ら彼らはこれら近代社会における不可逆的な変化に対して異議を申し立てするために自らの農本主義的思索を深めていった。この意味で、彼らの農本主義には何らかの近代社会への批判が内在していたと考えられる。

しかし、農本主義の先行研究において、往々にして農本主義は〈夢想的（非現実的）〉あるいは〈封建的（前近代的）〉であるとされ、さらには「天皇制ファシズム・イデオロギー」として見なされてきた。つまるところ、農本主義は、未成熟な近代日本の象徴として理解されてきたのである。しかし、前述したように農本主義には現在の農業における取り組みと共に通している点が指摘される以上、このような分析視角から農本主義を理解するだけでは不十分であると言わざるを得ない。そこで、戦前において展開された農本主義の「歴史的蓄積」や「歴史的厚み」を否定的な評価のみでまとめてしまうのではなく、現在、農業に関する学問分野において盛んに論じられつつある「農業＝環境問題」という図式を踏まえたうえで、農本主義の現代的な意味を見つけ出す作業が求められるのである。またこれは、敗戦を契機として「戦前日本＝未成熟な近代」という近代主義的ディスクールが支配的になった戦後社会において、必ずしもうまく成功したとは言えなかった農本主義の歴史的遺産の継承、さらにそれを戦後社会において活かしていくための作業でもある。

本報告では、「橋孝三郎（1893～1974）」をとりあげ、「農業＝環境問題」という観点から橋の農本主義を検討する。